

12月



津南通信 HP より



あの日のあの川 リレー日記 ～第23話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第23話主人公 山田怜奈

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：新潟県信濃川)

「季節を彩る川の記憶」

いつのこと？： 幼少～小学生

どこの川？： 信濃川、中津川

私が生まれ育った町は、川の恵みを多く受ける町でした。

私が住んでいた町は新潟県の南側に位置し、長野県と県境を接しています。その町は信濃川の上流にあり、その支流があちこちに存在します。町自体が川の流れによって川岸が削られてできたもので、その河岸段丘の規模は日本でも有数といわれています。生まれ育った町を離れ早くも数年経った今、あの町にいた時のことを思い出すとそこにはいつも川があります。

住んでいた家のすぐ裏には川が流れていました。その川は深さがひざの下くらいで幅も2m未滿の比較的小さな川でしたが、水の流れが速いために近づくことを禁止されていました。実際この年になってもその川に入ったことはありません。しかし、川岸の斜面の上で遊んだり川のそばの道路からぎりぎりまで近づいて川面を覗き込んだりと、今思うと危ないことも多くしていました。

その川は、季節によって様々な様子を見せていました。一番鮮明に思い出すのは真冬の雪が川の両岸に降り積もった時と、春の雪解け水が勢いよく川を流れている時の様子です。故郷の町は豪雪地帯にあり、冬が本格的に始まると雪の日が多く続き、降り積もった雪は景色を一変させます。川の両岸に雪がどんどん積もっていくと、次第に水面が見えなくなり、両側の雪はまるでトンネルのように川を覆い隠します。そうすると傍目から見るとそこに川があるようには全く見えず、朝晩の温度変化で固まった雪の上は小さな時の体重ではびくともしないため、おそろおそろ川の上の積もった雪の上を歩いて遊ぶことができました。箇所によってはトンネルに亀裂が生じていて、上から覗き込むと亀裂のだいぶ下の方には暗闇が広がりそこからは常と変わらない水

の流れる音がして、何も見えないこの雪の下にはいつもと同じように川があるのだと思って面白さを感じていました。

寒さが少しずつ緩み日差しが出てくるようになってくると、雪のトンネルは小さくなっていき亀裂は大きく広がり、川面が見えてきます。もっと時期が過ぎるとトンネルは消えてなくなり常より水量を増した川が勢いよく流れる様子がよく見えるようになります。川岸の斜面でもところどころ地面が顔を出し始め、いつもより大きな水音とザラメ状に変化し日差しを反射して光る雪の間から久方ぶりの緑を見るのが私の中での冬の終わりを感ずる光景でした。川辺に踏の臺やつくしが見え始めても雪はしぶとくあちこちに残り続け、土が混ざり始めて茶色くなり始めた雪の塊の間に植物が育っていきます。踏の臺が背丈を伸ばしていくと、いよいよ農家の一年が始まります。

住んでいた家から車を少し走らせると、私の母の実家があります。小さいころからずっと夏や冬には母方の従兄弟たちとその家に大集合し、何日も泊まり込んで遊ぶのが恒例となっていました。その家には家の周りの半分を囲み家の前の池に続く小さくて細い水路が通っていて、夏はもちろん、冬でもお気に入りの遊び場になっていました。夏には足を入れて水を掛け合ったり、底の砂利や石を手ですくってきれいなものを見せ合ったりしました。冬には雪の塊を投げ入れて水路をせき止めるなど、さまざまな遊びを飽かずに何時間でも続けました。その中でも特に夢中になってやっていたのは笹舟競争です。

家の裏手に回って少し歩くと笹がたくさん生えた森がありました。そこからよさそうな笹を大量に採取しては家に戻って各々笹船を作り、水路が始まる家の脇から一斉に流して速さを競っていました。水路はところどころコンクリートで蓋がされていて、蓋で水面が見えない箇所がありました。そのようなところを舟が通るときは、無事に出てくるか心配でドキドキしながら見守っていました。水路の両側には草が生えていたので、多くの舟は最後までたどり着く前にどこかの草に引っかかって止まってしまったり、作りが雑なせいで沈んでしまったりするのが常でした。そのためどこにも止まらず、なんとか浮かび続け最後まで流れ池にたどり着くのは稀でした。最後までたどり着いたときには、その笹舟が誰の作ったものかによらずみんなで喜び合いました。

あの町を離れ、私が見た景色や出会った人々、経験した出来事は私の世界を大きく広げました。毎日のように新しい人や物に出会い、新たな知識を獲得し目まぐるしい日々を過ごしています。しかしあの町で過ごした日々を思えば、すぐさまあの時の水の冷たさや日差しの暑さ、苔むした川岸を素足で歩いた感触などを鮮烈に思い出すことができます。

(次は石川弘之さんにバトンを託します)